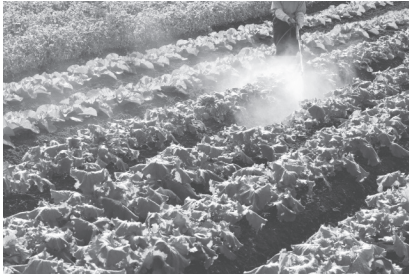


# 飼料の残留農薬による生体濃縮の危険

分解しにくい農薬は、食べる動物の体内で逆に濃度が上がってしまいます。

## 畜産物に残留する有機塩素系農薬

農薬が怖い。といえば普通イメージするのは野菜や米などの農産物に使われる農薬のことでしょう。しかし、卵や肉や牛乳などに残留する農薬も注意が必要で、むしろ、それらの農薬の方が恐ろしいとも言えるのです。



現在使用されている農薬は、何百という種類のものがありますが、それらのグループの中に、有機塩素系といわれるものがあります。

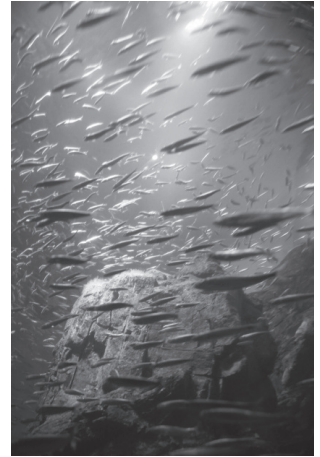
有機塩素系とは、炭素や水素や酸素からなる有機化学物質に塩素がくっついたもので、その代表選手として、PCB、DDT、BHCなどがあります。ちなみに、現在問題になっているダイオキシンも有機塩素系の化学物質です。DDTはその効き目のよさから、戦後全世界に広がりました。日本でもノミ対策で頭から白い粉を振りかけている映像を見たことがあると思いますが、あれもDDTです。

ところが、使用されて何年もたった後で、その恐ろしい発ガン性や残留性(分解しにくい)がわかり、日本でも1972年に製造が中止されました。PCBやBHCも同じように70年代に製造中止されています。ところが、このDDTやPCBなどは、とにかく自然界で分解されにくいので、いつまでたっても消えてなくなったりしないのです

## 生体濃縮のメカニズム

この有機塩素系農薬の問題は、動物や魚の体の中でも同じこと、いや、むしろ「食べる」「食べられる」の連鎖の中でますます濃縮されていくのです。例えばPCB

で汚染された海では、プランクトンが汚染され、そのプランクトンを食べた小魚ではさらに濃縮されます。その小魚を食べた大きな魚はもっと高濃度で汚染され、その魚を食べるアザラシはさらに高濃度にと、食物連鎖の階段をのぼる毎に10倍くらいに濃縮されて汚染されてしまうのです。



このメカニズムを「生体濃縮」といいますが、これは畜産の世界でも当てはまります。つまり、鶏や牛などの飼料にPCBやDDTなどが残留していた場合、それを食べた鶏の体内でもPCBなどは分解せず、蓄積されてしまうのです。そして、それを食べたお母さんの体に蓄積し、その母乳を飲んだ赤ちゃんにその毒が移動して蓄積されてしまうのです。

野菜などに使われる有機リン系などの農薬も恐ろしいですが、体内で分解しにくい有機塩素系の農薬は、畜産物については特に要チェックということなのです。

さらに、近年問題になっている環境ホルモンですが、ダイオキシンをはじめ、PCB、DDT、BHCといった有機塩素系の化学物質は、ことごとく環境ホルモンの恐れのある物質に指定されていて、その面からも注意が必要です。



(秋川牧園ウェブサイトより)